

平成 30 年 9 月 7 日現在

機関番号：74305

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03247

研究課題名(和文) 行き倒れに関する国際的比較地域史研究 - 移動する弱者の社会的救済・行政的対応の分析

研究課題名(英文) A historical study on persons dying on the street (Yukidaore) from an international comparative point of view: an analysis of social relief and administrative support for moving vulnerables

研究代表者

藤本 清二郎 (FUJIMOTO, Seijiro)

公益社団法人部落問題研究所・その他部局等・研究員

研究者番号：40127428

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本・英国・清国・朝鮮の「行き倒れ」と移動する社会的弱者の国際比較により、(1)「行き倒れ」救済の担い手は、それぞれの国家・社会・救済法制に規定されて、地域社会・教会・社会集団という相違があること、(2)日本における「行き倒れ」・捨子・遍路・乞食等の社会的弱者の発生要因については、近世では貧困に起因しない移動困難が含まれ、共同体への帰属の有無や身分が救済方法を規定しているのに対し、近代では貧困による家族の解体と地域社会からの離脱が主であるという相違・断絶があること、(3)近代日本の行旅病人対応法制は、近世の方法を一部踏襲し、植民地朝鮮にも適用していること等を解明した。

研究成果の概要(英文)：This historical research from the international comparative point of view on persons dying on the street (Yukidaore) and moving social vulnerables in Japan, England, the Qing Dynasty and Korea has proved that (1) Yukidaore should be relieved by either local communities, church or social groups, which was provided by each state, society and social law, (2) the reasons on occurring social vulnerables like Yukidaore, abandoned children, pilgrimage and beggars in Japan differ in the early modern and the modern era; in the former they include the difficulty of transferring unrelated to the poverty, and the relief method depended whether a person belongs to a community or not, or their social status, while in the latter the breaking-up of family and the leaving from local community are the primary factors, (3) the legislation on diseased drifters in Japan in the early era partly followed the way in early modern era and it also adopted in the colonized Korea.

研究分野：日本近世史

キーワード：行き倒れ 移動する弱者 乞食・非人 行旅病人・行旅死亡人 捨子 救済法 近世・近現代 社会福祉政策

1. 研究開始当初の背景

日本近現代の「行き倒れ」研究は、日本社会事業大学救貧制度研究会編『日本の救貧制度』(1960年)が「行き倒れ」対応法制を救貧法制との関連で提示したことを嚆矢とし、次いで小川信雄が明治前期の対応法制の成立過程を実証的に究明した(「行旅病人取扱規則から行旅病人及行旅死亡人取扱法へ」1998年)。次いで竹永三男は、近世の研究も参考にして、明治政府の対応法制の内容と変遷、「行き倒れ」の実態と地域社会の対応を、福島県を対象として分析し、「行き倒れ」を生み出す日本近代社会の特質の解明に取り組んだ(『「行き倒れ」の近代史』、2008年ほか)。

一方、近世では、松本純子「行き倒れ人と他所者の看病・埋葬 - 奥州郡山における行き倒れ人の実態」(2000年)、田中真次「城下町鳥取における行倒れ死骸処理の実際」(2001年)、柴田純「近世パスポート体制の影」(2011年)などの研究があり、藤本清二郎は都市支配、生活世界の構造分析という関心から城下町和歌山における飢饉行倒人の発生、人返し・乞食統制、死体処理等、領主的対応を分析していた(『城下町世界の生活史』2014年)。これらの研究は夫々異なった視点から「行き倒れ」救済・処理の実態、幕府・藩の救済法制を究明し、対象地は東国・畿内・西国に分布していた。

以上のような近現代の研究到達と、近世の個別分散性が強い研究状況にあって、近世・近現代の「行き倒れ」の夫々の構造、および全体像を社会構造・国家体制との関連で把握し、特質を解明する課題が存在するが、課題解決には日欧亜における基礎的事実の解明と、それらの比較という、より高度な視点・方法が必要であった。

2. 研究の目的

共同研究の目的は、(1)近世・近現代日本の「行き倒れ」の実態と国家・地域社会の救済機能の展開過程を地域に即して検証すること、(2)法制・行政システムが半ば整備されている日本(近世～現代)と、救貧法と教区制度によって対応する近世・近代の欧米、および東アジア国家(中国、朝鮮)との比較分析を行うこと、(3)「行き倒れ」と社会的弱者に対する救済の分析を通して当該社会と国家の歴史的特質を解明すること、以上の3点である。

3. 研究の方法

本研究では、「国際的比較地域史」を研究方法として設定し、(1)具体的には、近世～近現代の日本、近代イギリス、清代中国、後期朝鮮・植民地下の朝鮮を分析対象とし、(2)夫々の「行き倒れ」および社会的弱者の実態と国家・社会の対応を基礎的事実に立ち入って究明し、(3)実証分析の成果に基づく比較考察を進めた。この実現のため、国内外の文

書館等で新たな史料調査を行い、既収集史料を再検討した。また定期的な公開歴史研究会と、総合化のための公開フォーラムでの報告と集中討議、さらに米国・韓国の研究者の招聘、講演と討論を行った。

(1) 近世～現代の歴史的研究

日本近世では、城下町和歌山の「行き倒れ」の実態と救護・対応、賤民身分と藩政・地域社会の関連の歴史的分析の進捗を前提として、対象地域を紀伊・伊勢両国に拡大して事例分析を進めた(藤本清二郎・茂木陽一)。「行き倒れ」と関連する捨子・マビキについては長崎県の地域事例を発掘・検討し(茂木陽一)捨子については中国地方の史料調査に基づき、近世と近代の差違を社会構造との関連で究明した(沢山美果子)。民俗的宗教に関わる移動である遍路・巡礼については、四国遍路の多様性を視野に入れて、遍路の「行き倒れ」を分析した(町田哲)。近世では元来帰属していた村・町から排出された乞食=移動弱者が、非人集団に包摂されて身分を形成することから、身分制・身分社会論の観点で大坂の非人垣内を分析した(塚田孝)。

近世近代移行期の賤民制度の解体と勧進を否定された明治維新期の都市貧民層の変化について、東京府の具体的政策と地域の構造変化を分析した(ジョン・ポーター)。

近代では、福島県を対象とした分析を東京・長崎等に拡大し、「行き倒れ」の実態と発生要因、地域社会における救済と発生地市町村の対応行政を実証的に究明した(竹永三男)。「行き倒れ」対応法制では発生地市町村で医療救護を加えるとされていることから、地域医療の実態分析を行った(廣川和花)。戦間期大阪の地域社会における貧困問題については、その救済の慣行・機能の実証的分析(大杉由香)、大阪で創始された貧民層対策である方面委員制度の分析を進めた(飯田直樹)。

1899年制定の「行旅病人及行旅死亡人取扱法」が現行法として機能していることに鑑み、現代日本の社会福祉行政の観点から戦後の「行き倒れ」の実態・対応行政とその変遷を分析した(鈴木忠義)。さらに移動する弱者とその相互扶助的救済形態の事例として沖縄出身者の同郷団体を分析した(櫻澤誠)。

(2) 日本・イギリス・清代中国・朝鮮の比較史研究

近代イギリスについては、救貧法と教会制度下の対応・救護の問題を、アーカイブズの現地調査による収集史料で分析し、日本と比較した(小室輝久)。また清代中国の「行き倒れ」・類似現象に対応する国家政策の展開、社会的動向を分析した(村上正和)。植民地下の朝鮮の「行き倒れ」・類似現象、社会的弱者の実態と国家の政策、社会的対応に関する総督府文書等を調査・分析した(金津日出美)。

塚田孝が進めている日本近世の身分・身分制社会の国際比較研究において交流のある

在米日本史研究者の内、Maren Ehlers (ノースカロライナ大学シャーロット校)らと「行き倒れ」研究の交流を進めたほか、邊柱承(韓国全州大学校)との研究交流により研究の深化を図った。

4. 研究成果

(1) 日本近世に関する研究成果

近世分野では、「行き倒れ」現象に関わる多様な実態を発掘し、領主政策との関係を実証し、「行き倒れ」現象の全体を構造的に理解できる位置に立ち至った。

18世紀飢饉時の城下町和歌山の「行き倒れ」は集中の一時的現象であったが(藤本前出著書)、紀伊半島東部尾鷲周辺では熊野参詣による恒常的移動・「行き倒れ」がみられた(塚本明「江戸時代における貧しき旅人と地域社会」(2010、科研費成果報告書)。これらの研究を前提に、茂木陽一は御蔭参りでの「行き倒れ」の多発、18世紀前期伊勢神宮領の「行き倒れ」に縊死・餓死・事故死等の異常死が含まれ、乞食等が過半を占めたことを実証した。藤本清二郎は安芸・備後・播磨・摂津・和泉等の事例分析から、概ね18世紀後半期以降の「行き倒れ」対応として、検死、医療・投棄、往来手形による身分確認、村継送り、出身村への照会、埋葬(乞食・非人は取捨て)等の地域を越えた共通作法を確認し、往来手形・遍路掛袋等の盗難、偽造等の実態乖離の現象や、心願・巡拝名目での困窮家族の移動から、流動化する乞食現象の蔓延を予測した。「行き倒れ」対応経費は発生地、村、「行き倒れ」人の親戚・村等が負担したが、紀州藩では領主が負担した時期もあるなど(茂木陽一)今後の検討課題も確認した。

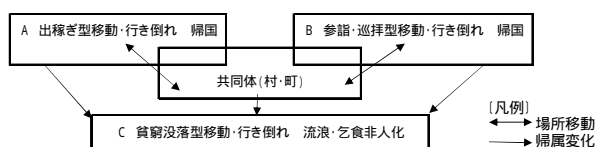
町田哲は19世紀の四国遍路を分析し、遍路を順番に宿泊させる「宿廻り」や「行き倒れ」人の「廻り養い」等の負担公平化の試み、家族遍路の「行き倒れ」では、家や村を追われ遍路で口を糊する者が多いことを指摘し、地域社会からの発生過程と特徴を解明した。

沢山美果子は松江藩・津山藩における子連れ「行き倒れ」・捨子の事例を分析し、番小屋・非人小屋等の救護施設の存在、「家」の保護からの離脱という女性「行き倒れ」人の発生契機、出身共同体と親族等の関与を解明した。また捨子に関し、天保飢饉時には乳児期まで育てた後の生活困難による捨て子事例が多いが、幕末には他者に命を託す意図から、産子を棉・襦袢に包み保護して捨てるようになるという変化を指摘した。茂木陽一も、島原半島で捨て子が多く見られるが、子捨場が藩の給付を受けて養子慣行として作用したことを確認した。

塚田孝は大坂道頓堀非人垣内と周辺社会の構造分析を精緻化し、森下徹は萩城下の勧進の構造を分析して、都市貧困層の生存様式を示した。畿内近国において「行き倒れ」を管理する長吏・番人(非人番)体制について

は、摂津尼崎藩領・播磨の実態解明が進んだ(藤本清二郎)。ジョン・ポーターは明治初期、東京府の貧民救済=統制政策、集団の有り様の変化=近代への移行過程を具体的構造的に解明した。近代への移行に関して、沢山美果子はジェンダーの視点から、行き倒れ人の男女差や、同伴する子どもに着目すること、生命を繋ぐための生存システムの変容という枠組みの中で考察する重要性を指摘した。

以上の研究から、近世における移動と「行き倒れ」の構造は、下図のように概念化され、この理解を前提に、はじめて近代明治国家の行旅病人・行旅死亡人対応法制との連続・不連続が議論しうることを確認した。



(2) 日本近現代に関する研究成果

近現代分野では、従来未解明であった「行き倒れ」の実態と社会的弱者に対する救済・救護の多様な様相を実証的に明らかにした。

竹永三男は、明治前期の「行き倒れ」救護で行われた村継ぎ送還の実態を、長崎県・東京府・秋田県の各府県行政文書の分析によって確認した。大杉由香は、大阪天王寺産院の事例から、戦間期、貧困層や中下層の出産・育児の厳しい環境と母体の健康維持等の未整備、東京に比して大阪の法律婚意識が低い点、私生児割合の高さ及びその改善傾向を実証した。飯田直樹は、警察・区役所経由の行旅病人の方面委員による救護と財団法人弘済会大阪慈恵病院への収容、他府県の方面委員と情報交換を解明し、寺の境内に長期間居住したり毎年来阪・救護を受ける常習の行旅病人の存在を指摘した。廣川和花は、精神病患者・ハンセン病者の取扱いに注目し、近代日本の地域医療における「行き倒れ」施療の実態を群馬県湯之沢地域・栃木県喜連川地域に即して検討し、「施療」制度や施設との関係の重要性を指摘した。

鈴木忠義は、社会福祉学の立場から、恤救規則 救護法 生活保護法と転換する一般救護制度と特別救護制度とで構成される近現代の救貧制度・公的扶助制度の特質に照らして、1899年に公布された「行旅病人及行旅死亡人取扱法」のもつ意義と機能を解明した。櫻澤誠は、1920年代に沖縄出身者が「本土」に定着し移動中の「行き倒れ」防止のために集住が進む中、冠婚葬祭等生活上の相互扶助が不可欠であったことを指摘した。

(3) イギリス・清国・朝鮮との比較史の成果

小室輝久は「行き倒れ」意味する英語がないことを指摘した上で、17~20世紀の救貧法 poor law に基づく行旅病人に対する公的な対処方法と、20世紀初頭のロンドンのコ罗纳(検死官)の記録を通して、行旅病死人と

行旅死亡人への対処方法を確認し、救貧法の対象である行旅病人は、救貧行政当局の一時的な対処を経てセツルメントのある教区へ移送され、行旅死亡人は埋葬されたが、セツルメントがある教区が経費を負担したため、対応は抑制的となったこと、「行き倒れ」への対応は各地方(各教区)の課題とされ、中央政府は政策的な関心を欠いていたことを明らかにした。清代中国の貧民救済、北京の救貧体制を検討した村上正和は、清朝政府は17世紀頃、養濟院(貧民・障害者を収容)・粥廠(炊き出し所)・棲流所(流民と行き倒れ病人の保護、食物・防寒衣服・医療の提供、行き倒れ死者の埋葬等)を設けたが、必ずしも正常に機能していないこと、一方民間で育嬰堂(北京)が設立され、陸慈航(子どもの引取、行き倒れ死体の回収、火葬)が行われるなど、宗教結社による慈善事業・相互扶助が広く見られたこと、総じて政府の災害救助・救貧政策は弱かったことを明らかにした。金津日出美は植民地朝鮮の社会事業と「行き倒れ」を分析し、在朝日本人に比べ朝鮮人の行旅病人・死亡人が圧倒的に多数であり、朝鮮全土で1920年代から急増し、40年まで人口増を上回って増加すること、日本政府は「内地」法令を適用したが、1934年時点で21の民間経営の救護所に資金援助したものの「救護中死亡」が約3分の1と多く、支援対象外救護施設に依拠していたことなどを明らかにした。さらに邊柱承教授(全州大学校)は、17~19世紀の朝鮮後期、意思に反して移動させられた人々である「流民」の実態と対応政策について来日講演を行い、正史記録に加えて地方に残された諸記録の発掘・分析成果を提示するとともに、「流民」の生活史、遺棄児・行乞児対策と地方での実態の実証成果を日本で初めて紹介した。

(4)総括と課題

以上のように、本研究では「国際的比較地域史」の方法で「行き倒れ」を分析し、日本の近世~近現代の通時的な地域史研究、日本・近代イギリス・清代中国・朝鮮後期・植民地朝鮮についての地域分析の比較的研究を進め、海外研究者の協力も得て次の諸点を解明した。

近世近代の日本、イギリス、清国・朝鮮における「行き倒れ」や移動する社会的弱者の個別実証分析により、その救済には、地域社会(共同体)・教区、社会集団が担うという違いがあり、国家の性格や基盤となる社会の在りように規定されて大きく異なることを確認した。

近代においては、一般救貧法制・行政と特別救貧法制・行政の在り方において、イギリスと東アジア諸国では大きな違いがあることを実証的に解明した。

日本における前近代と近代の「行き倒れ」や捨子、遍路廻国等の社会的弱者の移動現象

ついて地域史的分析を行った結果、近世では必ずしも貧困に起因しない移動困難が含まれ、共同体への帰属有無と身分が救済の方法を規定している等、近代との断絶を解明した。但し、近代の「行き倒れ」への国家的対応は近世の方法を一部踏襲していたことも明らかにした。近世の日本・清国・後期朝鮮には共通点と差異が見られたが、その比較から論点を抽出することは今後の課題となった。

最後に、改めて近世史における「行き倒れ」研究の課題は何か、なぜ「行き倒れ」研究であって公的扶助研究・窮民救助研究ではないのかと自問し、世界史的状况から省みた場合の研究史的課題、論点を提示する。即ち、イギリス・清国・朝鮮における「行き倒れ」現象は多くの場合、経済的貧困、病気、(個人的な)怠惰等に関わっており、日本近世の旅人救護は他に類例がなかったことが注目される。これは旅行・移動・移住という視点がないためすくい上げ得なかったことにもよるのであろうが、今後は、世界史における移動の概念を設定した上で「行き倒れ」を再検討する必要がある。同時に日本近世の交通史的観点からの「行き倒れ」研究と貧困史的観点からの「行き倒れ」研究を区別することも課題として確認しておく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計36件)

竹永 三男、「行き倒れ」から見た近現代の日本 「『行き倒れ』の近代史」の試み、人権と部落問題、査読なし、第912号、2018、pp.37-43

塚田 孝、近世大坂の役木戸 明治初期・再設置出願を手掛かりに、部落問題研究、査読あり、第223輯、2018、pp.40-60

邊 柱承、朝鮮後期の流民研究(講演録・論文抄訳、金津日出美・金泰勲訳)、部落問題研究、査読あり、第224輯、2018、pp.3-29

藤本 清二郎、畿内譜代藩「長吏」体制の展開と終焉 尼崎藩の場合、部落問題研究、査読あり、第223輯、2018、pp.2-39

町田 哲、遍路をめぐる三つの肖像 近世後期の四国遍路からみた民衆世界、部落問題研究、査読あり、第225輯、2018、pp.2-39(予定)

マーレン・エーラス、近世大野藩における貧困と救済、部落問題研究、査読あり、第221輯、2017、pp.47-65

金津 日出美、植民地朝鮮における「行旅死亡人」、その状況と対応行政、部落問題研

究、査読あり、第 221 輯、2017、pp.66-85

金津 日出美、植民地朝鮮の行旅病死者と宗教団体（原文は韓文）、韓国宗教、査読あり、第 44 輯、2017、pp.133-15

小室 輝久、近代イギリスにおける救貧法制と「行き倒れ」の取扱い、部落問題研究、査読あり、第 221 輯、2017、pp.86-103

沢山 美果子、江戸の子どもたち いのちを繋ぐ、Japanese Journal of Child and Adolescent Psychiatry、査読あり、vol.58、No.4、2017、pp.502 - 506

ジョン・ポーター、明治初期東京における町会所の解体と貧民救済 = 統制、ヒストリア、査読あり、263 号、2017、pp.163-188

村上 正和、治療と貧民 - 清代中期北京の医療について -、東洋学報、査読あり、99(1)、2017、pp.1-29

茂木 陽一、近世領主法に見る捨子の取り扱いについて - 三重県域を例に -、地研年報、査読なし、第 22 号、2017、pp.55-67

飯田 直樹、部落事務員について、大阪歴史博物館研究紀要、査読なし、第 14 号、2016、pp.15 ~ 36

廣川 和花、湯之沢部落のハンセン病者と地域社会、日本ハンセン病学会雑誌、査読あり、85(2)、2016、pp.75-78

大杉 由香、近代日本の福祉問題の歴史的特質 事例研究（戦間期における名古屋及びその近郊と大阪市）から現代への連続と断絶を考える、部落問題研究、査読あり、第 213 輯、2015 年、pp.88-134

鈴木 忠義、二〇〇〇年以降における福祉課題の諸相 「行旅死亡人」を通して、部落問題研究、査読あり、第 213 輯、2015、pp.135-149

〔学会発表〕(計 54 件)

沢山 美果子、松江藩領の捨て子と子連れ行き倒れ人、公開フォーラム「行き倒れに関する国際的比較地域史研究」、2018 年 3 月 17 日

金津 日出美、植民地朝鮮における社会事業と「行旅病死者」、公開フォーラム「行き倒れに関する国際的比較地域史研究」、2018 年 3 月 17 日

廣川 和花、近代日本の地域医療のなかの「施療」と「行き倒れ」、公開フォーラム「行き倒れに関する国際的比較地域史研究」、2018 年 3 月 17 日

鈴木 忠義、社会福祉学からみた行旅死亡人、公開フォーラム「行き倒れに関する国際的比較地域史研究」、2018 年 3 月 17 日

村上 正和、北京育嬰堂における行き倒れへの対応、公開フォーラム「行き倒れに関する国際的比較地域史研究」、2018 年 3 月 17 日

石橋 知之、文政十三年撰津国神戸村による行き倒れ人への対応、部落問題研究所歴史研究会、2018 年 3 月 3 日

大杉 由香、1920・30 年代の大阪市における貧困問題と子どものゆくえについて - 大阪市公文書館史料から見えてきたこと -、福祉社会研究フォーラム、2018 年 2 月 10 日

邊 柱承、朝鮮後期の流民研究(招待講演)、部落問題研究所公開フォーラム、2018 年 1 月 8 日

藤本 清二郎、近世日本の「行き倒れ」旅人と非人・乞食、その境界、福祉社会研究フォーラム、2108 年 2 月 10 日

竹永 三男、近代日本における行旅病人・行旅死亡人 - その法制・実態・対応行政の歴史的研究 -、福祉社会研究フォーラム、2017 年 11 月 25 日

金津 日出美、餓えて斃れる人々 植民地朝鮮の「行旅病死者」に関する基礎的研究、東アジア若手研究者合同研究フォーラム(北京日本学術研究センター)、2016 年 11 月 19 日

藤本 清二郎、19 世紀広島藩の旅人「行き倒れ」その実態と対応策、部落問題研究所歴史研究会、2017 年 9 月 16 日

ジョン・ポーター、Poverty Management, Social Integration, and Subsistence in Meiji Tokyo, The Meiji Restoration and Its Afterlives: Social Change and the Politics of Social Change、2017 年 9 月 15 日

飯田 直樹、大阪府方面委員制度の創設と警察社会事業、福祉社会研究フォーラム、2017 年 6 月 17 日

大杉 由香、戦間期の乳児・児童をめぐる社会環境 - 1910 年代後半から 30 年代にかけての大阪を中心に -、部落問題研究所歴史研究会、2017 年 5 月 7 日

竹永 三男、「行旅病人及行旅死亡人取扱法」(1899 年)以前の東京府における「行き倒れ」と対応行政 行旅病人の運送と原籍確認、部落問題研究所歴史研究会、2017 年 3 月 19 日

櫻澤 誠、沖縄出身者の「本土」への移動と相互扶助 先行研究と主要県人会史をもとに、部落問題研究所歴史研究会、2017 年 3 月 19 日

町田 哲、遍路をめぐる三つの肖像 近世後期の四国遍路からみた民衆世界、国際シンポジウム「都市の巨大化と民衆世界」、2017 年 3 月 11 日

茂木陽一、近世三重県諸藩領における棄児と行倒人保護、公開フォーラム「行き倒れに関する国際的比較地域史研究」、2018 年 3

月 17 日

小室 輝久、イングランドにおける治安判事書記の役割、法史学研究会第 182 回例会、2016 年 11 月 18 日

⑲飯田 直樹、『方面委員一件書類』からみる大阪府方面委員制度 方面幹事・釜ヶ崎・供養施米、部落問題研究所歴史研究会 2016 年 7 月 24 日

⑳金津 日出美、植民地朝鮮における「行旅病死」をめぐると、東アジア日本学会（韓国）2016 年春季国際学術大会、2016 年 5 月 21 日

㉑塚田 孝、近世都市史研究の展開と大坂の非人集団、上海社会科学院「都市文化財研究」創造チーム主催都市史講演会、2015 年 11 月 15 日

㉒小室 輝久、イギリスにおける「行き倒れ」法的な対処方法と実例、部落問題研究所歴史研究会、2015 年 11 月 14 日

㉓村上 正和、清代北京の救貧事業 17 - 20 世紀の歴史的展開、部落問題研究所歴史研究会、2015 年 11 月 14 日

㉔竹永 三男、「行き倒れ」人と子連れ・女性・病 日露戦後の福島県の事例の検討、部落問題研究所歴史研究会、2015 年 8 月 1 日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤本 清二郎 (FUJIMOTO, Seijiro)
公益社団法人部落問題研究所・研究員
研究者番号：40127428

(2) 研究分担者

竹永 三男 (TAKENAGA, Mitsuo)
公益社団法人部落問題研究所・研究員
研究者番号：90144683

(3) 連携研究者

飯田 直樹 (IIDA, Naoki)
公益財団法人大阪市博物館協会・大阪歴史博物館・研究員
研究者番号：10332404

大杉 由香 (OHSUGI, Yuka)
大東文化大学・スポーツ・健康科学部・教授
研究者番号：60297083

金津 日出美 (KANAZU, Hidemi)
立命館大学・文学部・准教授
研究者番号：40802103

小室 輝久 (KOMURO, Teruhisa)
明治大学・法学部・准教授
研究者番号：00261537

沢山 美果子 (SAWAYAMA, Mikako)
岡山大学・文学部・研究員
研究者番号：10154155

櫻澤 誠 (SAKURAZAWA, Makoto)
大阪教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：90531666

鈴木 忠義 (SUZUKI, Tadayoshi)
長野大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号：60440195

塚田 孝 (TSUKADA, Takashi)
大阪市立大学大学院・文学研究科・教授
研究者番号：60126125

西尾 泰広 (NISHIO, Yasuhiro)
公益社団法人部落問題研究所・研究員
研究者番号：70469641

廣川 和花 (HIROKAWA, Waka)
専修大学・文学部・准教授
研究者番号：10513096

John, PORTER (ジョン、ポーター)
東京外国語大学大学院・国際日本学研究科・講師
研究者番号：30572614

町田 哲 (MACHIDA, Tetsu)
鳴門教育大学・学校教育研究科・准教授
研究者番号：60380135

村上 正和 (MURAKAMI, Masakazu)
新潟大学・人文学部・准教授
研究者番号：90736787

茂木 陽一 (MOGI, Youichi)
三重短期大学・法経科・教授
研究者番号：80200327

森下 徹 (MORISHITA, Toru)
山口大学・教育学部・教授
研究者番号：90263748

(4) 研究協力者

Daniel, V, BOTSUMAN (ダニエル・ボツマン)
イエール大学・歴史学部・教授

Maren, EHLERS (マーレン・エーラス)
ノースカロライナ大学・シャーロット校・准教授

邊 柱承 (Ju-Seoung BYEON)
全州大学校・人文大学・教授

石橋 知之 (ISHIBASHI, Tomoyuki)
神戸大学大学院・人文学研究科・博士前期課程